本当の私は

鋼野タケシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
本当の私は

【Ｎコード】
Ｎ２５１２Ｑ

【作者名】
鋼野タケシ

【あらすじ】
私は天才だ。天才科学者である私は、ある一つの研究を完成させた。そう、それは人間の頭脳のデータ化だ。

私は天才だ。

近年、めざましい発展を続けるロボット工学界では、新たな技術が次々と確立され、夢物語でしかなかった人間とロボットの共存が始まりつつある。

私も新進気鋭の科学者たちに負けじと研究を続け、とうとう今日、誰もが辿り着けなかった一つの境地へと辿り着いた。

人間の頭脳のデータ化だ。人間の頭脳をデータへと変換し、保存・コピーを可能とする。

アンドロイドに自らの記憶を移植すれば、マスターデータが損なわれない限り、何度でも自分を生み出すことが出来る。擬似的な不老不死。まさにＳＦの世界だ。ロボットを人間の友とするのではなく、ロボットそのものに人間の魂と言うべき脳データを移し替える。この研究を学会で発表すれば、私は喝采を浴びるだろう。

だが、私は天才だ。

凡人の賞賛など私の目的とするところではない。私の目的はただ一つ。誰もが辿り着けない未知の技術、まだ誰も知らない世界への到達。すなわち研究し続けることが私の生きる道である。

そう、私はこの技術を発表することなく、自分一人で用いることとした。

まず初めに、私と寸分違わぬ外見を持つアンドロイドを作成する。コレは決して難しいことではない。法律により人間型アンドロイドは禁止されてはいるが、そもそも二十三世紀も目前に迫るこの時代、大部分が宗教に基づいている法律が改善されていないことこそ過ち

なのだ。私は法律には縛られない。私はまだ幼い時分から、自らの望むように生きた。誰にも、何にも縛られはしなかった。教師に言われても決して宿題は終わらせなかったし、母に言われても決して歯医者には行かなかった。結局虫歯が悪化して泣きながら病院に連れて行かれたのは、人生で唯一の敗北だと思っている。しかしこの敗北を教訓として以降、私は朝夕、十五分の歯磨きを欠かさず行っている。以来、虫歯になったことは一度もない。同じ轍は踏まない。一つの敗北から次の勝利をつかみ取る。私は幼い頃から天才だった。

話しを戻そう。

自らと寸分違わぬロボットを作ることは難しくない。今の技術で簡単にできるのだ。

私は自分型のロボットを手始めに三体、作り出した。

その三体のロボットに、私の記憶を全てコピーする。

すると、どうであろう。

私と同じ思考を持ち、私と同じ行動をする別々の私が三人、この世に現れる。

マスターデータである私に人格は残っているが、別々の私も私と同じだ。

三人の私が代わる代わる研究を続け、全ての記憶はマスターデータである私を介して共有する。そうすることで二十四時間、一瞬たりとも無駄にせずに研究を続けることができる。食事をする時間も、睡眠を取る時間も、リフレッシュしている時間も、その間に別々の私が研究を続けている。ただでさえ凡人の数十倍、いや数百倍の頭脳を持っていると言うのに、更に凡人の何倍もの時間を有効に使えるというワケだ。

おかげで私と別々の私は、次々に新たな研究を成功させ、学会でも一躍有名になった。講演会の依頼も増えた。私が疲れている時は

別の私が、別の私にメンテナンスが必要な場合は私自身が講演をした。休む間もなく働き続ける私は『研究に没頭するあまり、自らもロボットに改造した』などと揶揄されたほどだ。
プライベートも充実したことは言うまでもない。それまでは研究尽くしで遊ぶヒマなどなかった。だが今は、私が読書に興じている間も、好きなオーケストラを聴いている間も、世界のキタノの映画を見ている間も、別の私が研究を続けているのだから。
研究所に戻った後、別の私から記憶を戻すだけで良い。そうすれば、私が遊んでいた間の研究を私は行ったことになる。
私の研究は続く。
いつ如何なる時も止まるコト無く、決して。

私の研究は続く。私のいないところで。私以外の私は、私に思いも寄らない閃きで新たなロボット制御システムを開発した。私はそのシステムの完成度に驚き、私の才能に嫉妬を覚えた。
私は寝る間もなく研究を続けている。その間、私はぐっすりと眠り、趣味に興じ、気分が乗れば研究に戻った。私が研究に行き詰まると、私に任せて私は休憩をした。私のエネルギーを補給している間、私は研究を続けた。
ある日、私は鏡を見た。そこには、私が移っていた。鏡の向こうの私は今も研究を続けている私だろうか。それとも、鏡を今覗いている私だろうか。
鏡を今覗いている私が鏡に映っている私なら、鏡の前にいる私はどこにいる？　鏡の向こう側か？　それとも、鏡のこちら側だろうか？
私にはわからなかった。

私は研究に携わることを止めた。私が研究を続けなくとも、私は休むことなく研究を続けている。日に一度、記憶データさえ回収すれば良い。そうすれば私は何もする必要がなく、一日の研究をしっ

かりと続けることが出来た。
私は外出することを止めた。今は外に出ることも億劫だ。人と会う約束をした日も、私は出掛けずに私に出掛けさせた。何、構うまい。私と同じ思考で動く私なのだから、私が行っても私が行かなくても変わりはないのだ。日に一度、記憶データさえ回収すれば良い。そうすれば私は何をする必要がなく、充実する一日を送ることが出来た。
私は本を読むのを止めた。音楽を聴くのを止めた。映画を見るのも止めた。すべて私以外の私に任せた。どうせ私が見たいものは、私が見るものだ。何を見ようか悩む必要もない。日に一度、記憶データさえ回収すれ良い。私が見た映画は、私が見たかった映画に他ならないのだから。
そのうち、私は寝たきりになった。だが、私は今も精力的に研究を続け、交友関係を広げ、気分転換に音楽や読書に興じている。
私は寝たきりであるにも関わらず、その全てを行っている。
私がいなくとも、私の人生は続く。

それならば、私は何者だ？

今、私が何をしているのかわからない。私が今、寝たきりである私なのか、それとも研究所に籠もっている私なのか、それとも先ほど玄関から出て行ったのは私なのだろうか？
私は、取り返しの付かないことをしてしまった。
私は今、分裂している。夢遊病者のように私の自我が勝手に動き出し、私のあずかり知らぬところで私は生きている。その原因を私は作ってしまったのだ。
今、ここにいる私は私ではない。私は今、私の居ない場所にいる。

だから私は、どこにもいない。

もはや考えることが恐ろしくなっている。
どこにもいないはずの私が、今ここにいる。私は恐ろしくなった。存在していないはずの私が存在していることに。
だから私は決意した。もう一度私を一人に戻そう。
簡単だ。マスターデータである私だけになれば良いのだ。何、疲れているだけだ。私が一人に戻れば、この膿んだ精神も元の溌剌とした私に戻るであろう。
私は拳銃を手にした。私以外の私が私である以上、大人しくスクラップになれと言って納得はしないだろう。だから簡単に、拳銃でOSごと破壊することにした。元々私以外の私は人間ではないから、殺人には当たらない。器物破損にはなるだろうが、私の所有物だ。誰にも訴えられることはない。
私は拳銃に弾を込めて、スライドを退いた。薬室に弾丸が移動する。そして引き金を引き、拳銃を構えた。真っ黒い銃口が私に向いている。初めからこうしておけば良かった。ノイローゼ気味になるほど悩む必要はなかったのだ。私に拳銃を向けた私が、引き金に掛けた指をゆっくりと動かす。ああ、これで楽になるはずだ。

私は血と脳症を撒き散らし、絶命した。ああ、これで楽になるはずだ。自分以外の自分が何人もいるなんて、耐えられる話しではない。
元に戻るだけで、何も変わりはしない。私以外の私は消えて、これで私は私だけになる。
その前に、消してしまった私を処理しないといけない。誰かに見られて誤解を受けないようにしなければ、この場合、警察に捕まれば何罪になるのだろう？　私を殺したのだから、これは自殺だろう。自殺で禁固刑を食らったなんて話しは聞いたこともないが。
私は私の死体を担ぎ上げ、ふと疑問に思った。

はて、私が私を殺したのなら、私を殺した私は誰だろう。

（後書き）

ハッピーエンドが大好きです。
いつの時代も努力・友情・勝利が三本柱で熱血が最強なんですよ。
だってのにこんな小説書いてます。どうしてこうなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2512q/

本当の私は

2011年1月18日21時40分発行